

今回ご紹介するのは、パーキンソン病のある利用者C様のリハビリテーションの関わりです。ご自宅での訪問リハビリから施設での生活リハビリに、継続して関わっています。自宅では、転倒が多く、歩行に不安を抱えておられました。現在は、将来的な在宅生活を見据えて、一定期間、施設で生活しながらリハビリを継続されています。施設では、歩行時に安心できるよう、歩行器を選定・導入しました。ご本人は選定した歩行器を気に入られ、歩行が安定したことで歩行量が増え、運動機能の向上や移動能力の改善、座位(上半身を起こして座っている姿勢)で過ごせる時間の延長につながっています。

一方で、ご自宅では生活空間が限られるため、歩行器の使用が難しい状況にあります。そこで、壁伝いや手すりを活用した移動の方が現実的で安全であることをご説明し、納得いただいた上で、施設内でも自宅生活を想定した伝い歩きや手すりを使った移動練習を行っています。

リハビリを通じて、C様との関わりの中でどのような寄り添いができていたのか、改めて振り返りました。まず、ご本人が望む生活を丁寧に伺い、その想いを出発点として、必要な支援や課題を整理します。その上で、支援に携わる立場として気づいた点や、生活がより良くなる可能性を伝え、理解・納得していただいた上で、選択していただけるよう、対話を重ねてきました。

ご本人の想いと支援する側の考えが一致しない場面もありますが、ひとつの正解が定まらない中で、対話を重ねながら解決策を共に探っていく。その積み重ねが、寄り添ったリハビリにつながっているのではないかと感じました。今後もこの視点を大切にしながら、リハビリに取り組んでいきたいと思えます。



文責：作業療法士 矢野

2026年、午年が始まり、早くも1か月が過ぎました。時が過ぎるのは本当にあっという間ですね。本年もナーシングホームももをどうぞよろしくお願いいたします。今年にはスポーツイベントが盛りだくさんの一年になりそうで、とても楽しみです。今回のテーマは『寄り添い』です。この言葉には、「物理的に近く寄ってくっつくこと」や「相手の気持ちに共感し、心に寄り添うこと」といった意味があります。今回は、さまざまなカタチの『寄り添い』についてご紹介させていただきます。

～利用者様の痛みに寄り添って、少しでも楽に気持ち良く過ごしてもらおう～

利用者A様は、主に車椅子で生活されています。ベッドで横になる姿勢をとると背中や腰に強い痛みがあるようで、横になって楽な姿勢で過ごすことが難しい状態でした。私たちは、ももをご利用いただいている時だけでも、少しでも楽に、気持ち良く過ごしてもらおうと考えました。

A様の痛みの原因は何かを知ることから始めました。どんな姿勢で痛くなるのか、痛みの加減はどうか、介助の方法で痛みが強くなり不快にならないかを聞き取りました。そして、まずは移乗介助を見直して、大きく体を動かす時に痛みが強くないように工夫をしてみました。しかし、十分な改善にはつながらず、思ったようには痛みはとれませんでした。そこで、リハビリの専門スタッフに相談して、介助方法以外にも何か対策や方法はないかを考えてみました。

リハビリスタッフの見立てとしては、「長時間同じ姿勢をとることで、背中や腰の筋肉が強く緊張しているのではないか。姿勢を大きく変えるときは筋肉がより一層こわばってしまい、痛みが出ているのではないか。」とのことでした。そこで、A様に「背中や腰、足のマッサージをして筋肉をほぐし、車椅子で座っている時や移乗する時には、体を少しでも動きやすい状態に準備してみましょう。」と提案したところ、ご理解をいただき、実施することになりました。

通いのサービス利用中は、動作前のマッサージを毎回して筋肉をほぐし、足の屈伸運動も一緒に続けたところ、A様は、「徐々に痛みが緩和され、楽になってきた」と言われるようになりました。車椅子に座っている時や乗り移る時の痛みも少なくなり、表情も和らいできている様子が見られます。以前と比べて痛みが減り、楽で気持ちよく過ごされている姿は、私たちにも安心して喜ばしく、介護スタッフとリハビリスタッフとで協力をして、A様に少しでも寄り添うことができたのではと思っています。

今回は、リハビリ専門家のアドバイスを受け、工夫をしたことで、利用者様の痛みが和らぎ、楽に過ごしてもらえることにつながりました。利用者様それぞれの身体状態や生活習慣に目を向け、普段の生活のなかに隠れている課題に気づくこと、そして、何よりお一人お一人の不安に耳を傾けて、寄り添い、少しでも楽に、気持ちよく過ごしてもらえるように寄り添いたいと思えます。そして、事業所にいる色々な専門職の知識や技術を取り入れた最善のケアを心がけていきます。

文責：山下・木戸・津田

お知らせ 特定技能外国人 誕生！

当社では、2021年から技能実習生の受入れを開始しました。3年間勤務(実習)するなかで介護力を磨き、日本語力もつけてきました。そして、無事実習を終えた2名が、今年から特定技能外国人として“もも鳥取事業所”で働いています。今も日々、介護技術や日本語等をしっかり学び、頑張っています。



★職員募集中★ 私たちと一緒に働きませんか? 詳細はホームページをご覧ください

ナーシングホームもも 検索 <https://www.momo3.net>

<p>【本社】 〒511-0241 員弁郡 東員町鳥取917-2 TEL 0594-75-0302</p>	<p>【鳥取】 〒511-0241 員弁郡 東員町鳥取917-2 TEL 0594-86-1110 TEL 0594-86-1113</p>	<p>【いなべ】 〒511-0428 いなべ市 北勢町阿下喜3514 TEL 0594-72-3530</p>	<p>【四日市】 〒512-8054 四日市市 朝明町441-1 TEL 059-336-3330</p>	<p>【桑名】 〒511-0901 桑名市 筒尾1-13-1 TEL 0594-33-0302</p>
---	--	---	---	---



今年5月で100歳になられる四世代同居のS様は、4年前のデイ利用当初は、車いすを介助してもらい、酸素もつけていらっしゃいました。元々は地元の方ではないので、知り合いもなく、デイに来ることを嫌がり、消極的でした。しかし、デイスタッフが利用者様間に入りながら、年齢の近い人などと会話を勧めていくうちに、和やかな表情も多く見られるようになり、徐々にご自分から他の人に声をかけての会話が増えてきました。

デイでの生活が充実してくるにつれ、笑顔も増えていき、体操や機能訓練の積み重ねにより、本人の体力の回復も高まり、酸素ボンベが外れ、短い距離であれば、両手引きや手すりを使った歩行ができるほどになりました。歩行訓練時、スタッフが手を引きながら「ガンバレ」「ありがとう」と声を掛け合いながら、一步一步足を確実に進めています。そんな言葉を掛け合う姿は、周りにあたたかく響き、利用者・スタッフにも元気を届けてもらっています。

デイ利用中のS様は、塗り絵を好まれて、色合いをじっくり自分で考えながら、重ね塗りでこだわりを持って綺麗に仕上げられます。集中力の途切れない姿には感動さえ覚えます。また、負けず嫌いな一面もあり、レクリエーションでのサッカーや風船バレーには張り切って真剣に参加され、負けると本気で悔しがられます。S様が真剣に色々なことに取り組み、楽しむその姿を見て、他の利用者様からは「Sさんは目標です」といった言葉をよく耳にします。

そんなS様ですが、去年の暮れに一時、体調が優れない時期がありました。「えらい、ちょっとみて」と看護師に訴えて、ベッドで1日休まれる日もありました。その頃は表情も暗く、沈んだ顔つきで、「もうあかん」「もう最後でいいかな」と弱気な発言が日々出るようになっていました。

我々スタッフは「深刻に考えすぎないようにね」、「何言ってるの」、「まだまだ元気で5月には100歳のお祝いするよ」等々、デイで過ごす日常の何気ない会話の中で、Sさんを励ます力になればとの思いで一言一言の声かけを丁寧に心掛けました。

S様の生命力はたくましく、年が明けてからは、表情も明るさが戻り、塗り絵やレクに再び笑顔で取り組む姿が戻ってきました。特別なことをした訳ではありませんが、日々、体調を気にかけて、明るく声をかけ合うデイサービス仲間やスタッフの存在が、S様に明るさと生きる力を取り戻すきっかけになったのではないかと思います。

最高齢で元気な姿を見せてくれているS様ではありますが、ご家族と共に私たちスタッフは、【生と死は隣り合わせ】という思いを持たれていることを忘れずに、表情や言葉に耳を傾け、受け止めていきたいと思っています。また、デイをご利用いただく皆様の時間が、その方の日常生活に溶け込み、笑顔多く、元気に過ごせるものになるように、寄り添い、サポートさせていただきます。



文責：藤江・近藤(ひ)・渡部(晴)



私の80歳になる父が、昨年末から全身が黄色くなる「黄疸(おうだん)」という症状を呈しました。父は5年前に胃がんで胃を全摘し、2年前からは前立腺がんも患っています。現在は手術が難しく、薬物療法を続けている状態です。

今回の黄疸の原因も、やはり「がん」でした。現在は腹部にチューブを通し、胆汁を体外に排出する処置をしていますが、がんそのものを取り除く手術は不可能との診断を受けました。

こうして、父は自宅で余生を過ごすことになりました。

父が自宅で療養生活を過ごすようになってから、私がお実家へ帰る頻度が増えました。しかし、実家は住宅街にあり、駐車スペースが限られています。そこで、実家近くの月極駐車場を借りることにしました。

その駐車場の管理をしていたのは、実家の向かいにある温泉施設です。契約の際、借りる目的を尋ねられたため、父の看病で頻繁に帰省していることを伝えると、社長さんが温泉の無料チケットを手渡ししながらこう仰ってくださいました。

「看病は大変でしょう。こちらに来たときは、娘さんも温泉に入ってリラックスしてくださいね」ただ駐車場の事務手続きをしに行っただけなのに、その温かい言葉に胸が熱くなりました。

実は、父は30年間にわたりこの温泉に通い続けていました。

そのことを伝えると、社長さんはとても喜んでくださり、「きっと顔を見ればわかるだろうね。病気は残念だ。

本当はお父さんにも入りに来てほしいけれど……」としみじみと話してくださいました。

仕事の枠を超えたその一言が、私の心に寄り添ってくれたようで、深く印象に残っています。この施設がいつも多くのお客さんで賑わっているのは、社長さんのこうしたお人柄ゆえなのだと強く感じました。

現在の父は、訪問診療、訪問看護、ケアマネージャーにお世話になっています。入院中からもそうでしたが、周りの人がみんな思いやりのある方ばかりでした。そんな方々に囲まれて、自宅で穏やかに過ごしています。皆様のあたたかいサービスに感謝、感謝です。

私も、介護をされている家族様や利用者様に温かい言葉をかけられるよう、そして相手の痛みを「自分事」として感じられるよう、日々努めていきたいと思っています。



文責：吉岡・筒井